

日本近代科学史の分類について

OUCHI, Hyoe / 大内, 兵衛

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Hosei Historical Society in Hosei University / 法政史学

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

1953-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010638>

日本近代科学史の分類について

大内 兵衛

開国百年記念文化事業会編「明治文化史論集」というのに、湯浅光朝という人の「日本近代科学史の時代区分について」という論文がのつている。私は湯浅光朝という人はどんな人か知らない。ただ肩書に「日本科学史協会幹事」とあるので、その道の研究者かと思う。この論文も論文としてあまり論旨明晰ではなく、論証も十分でないが、それでも、その方面での新しい研究であるに相違ない。とにかく先日それを見ているうちに、その時代区分とわれわれの経済学の時代区分とが、密接に関係していることに興味をおぼえた。

湯浅氏は、ここで科学とは自然科学、工学、産業の三つの分科のことであり、社会科学はこれを除外している。そして湯浅氏はこういうことをいつている。科学史の時代区分は、いまの段階においては一種の仮説であつて、これを見て、その区分が妥当であればそれが歴史の法則を発見するに役立つであろう。そういう意味で試みに日本の近代科学史の分類をして見たいと思う、と。これは同感である。

氏は、この意味での日本の近代はシーボルトの渡来にスタートするとし、それを次の如く区分する。

第五期 八幡製鉄所の建設から

20年 1897 (明治30) 1916 (大正5)
日本の学者外国に認められる。重工業はじまる、この終期に工場法ができる。

第六期 理化学研究所の創立から

15年 1917 (大正6) 1931 (昭和6)
科学の自由独立期(外国からはなれる)重工業確立、工業より農業がみつ。

第七期 日本学術振興会の創立から
16年 1932 (昭和7) 1947 (昭和22)
軽工業より重工業がみつた。組織的協力的連絡研究が始まる。

D 第八期 日本学術会議の創立から

再編成

以上の区分は、一応、誰の目にもつく一番大きな事件をそのままにならべて、そのうちからその時代の特色を見ようとしたものであることは湯浅氏の明言するところである。しかし、この分類をする目的はといえば、それは歴史のうちにある一般的な発展の法則をさがそうとするにあるということである。さて、この区分を見て私が思うことは、第一、この区分は一方においては科学の重大な原理の確立またはそれにもとづく工業上の発見によつてはなされていない。第二、それよりもむしろ科学の発達に影響を及ぼした政治的な出来事を以て時代区分の中心にしている。例えば放射線の建設というのはどうか。それは一つの工業的大事件には相違ないが、それは一つの政治的な目的をもつた事実である。その他、学制の頒布はどうか、帝国大学令の公布はどうか。こう考えてくると、通じて、この時代区分のメルクマールとなつてゐるのは政府の科学に対する政策、その政策の現われたる特殊な機関の設定ということになつてゐる。

このことから、私は、一つの事実を指摘することが出来ると思う。それは外ではない。日本の科学の発達には政府の科学政策が重大な意義をもつてゐるということ、いいかえれば日本科学の発達の動機と力となつたものは政府の政

策であつたということこれである。少くともこういう政治的政策的事実を以て科学史の時代区分をするのがいいという自然科学者がいるということは、日本ではすべての理論科学とすべての応用科学は、政府の保護と干渉と方向指示とによつてなされたといつてよいという意味ではないか。日本では科学は、それ自身の内部的な要求によつてその発展をとげたものとは言えないということであろう。自然科学についてこういう時代区分が正しいかどうかは、かくして問題となると思ふけれども、それについて何等の判断をする力は私にはない。

そこで私は、私の専門とする経済学の発達が、この時代区分とどういう関係にあるか、われわれの学問の分野ではどういうことを時代区分とするのが適當だろうかということを考えて見ようと思つた。そのとき、私の心に浮んだのは経済学上の重要な著書であつて、経済政策又は学問政策ではなかつた。これは湯淺氏の方法と相當に異なる考え方である。

この第一期、第二期においては、経済学もまた全く輸入時代であり、先ず何よりもオランダの本の翻譯であつたことは事実である。そして訳者の主なるものは神田孝平、福沢諭吉等々であつた。翻譯の原本はいずれもかんたんなオランダの通俗書、かんたんなアメリカの通俗書であつたが、それが日本の旧来の経済制度の時代おくれであること、新しい社会制度はヨリよき制度であることを示すのに役立つたと思われる。要するに、明治の變革は当然であり、且ついいことであるということ、これらの書物は国民に示した。

第三期に入ると、とくにこの時代の指導者として目立つたのは福沢諭吉と田口卯吉とである。そしてこのとき、この二人はもはや単なる知識の輸入者ではなく、実に日本の指導者であつた。福沢の多くの著書のうち、その代表的な一つである「学問のすすめ」は明治五年であり、「文明論の概略」は明治八年の作であり、また田口卯吉の代表作である「日本開化小史」は明治十年の作である。この二つは明らかに自由主義であると共に進歩主義であるが、この自由主義の進歩主義というのは西洋の文明を日本にとり入れるということであつた。それにしてもこれがつぎつぎ行渡されたのはどういふわけであるか、またそれが日本国民の力となつたのはどういふわけであるか。それには学制が布かれたということも重大であるが、そういふのはあまり形式的な説明であると思われる。それよりも福沢や田口の思想

そのものがもつと社会的な効用と社会的な意義即ち資本主義が新文明の基調であるということを教えた点にあつたと思われる。

第四期の経済学を代表するものは一つは前田正名の興業意見であり（明治十八年）、他は菅沼貞風の「大日本商業史」である。これは二つとも、日本ではじめての実証的な研究といつてよいが、同時に、日本には日本独自の経済があるという見地に立つて日本の特長は農業であり商業であるという論証をしようと試みている。明らかに前時代の反動である。そして周知の如く東京帝国大学はこの反動の学問的城砦として利用され、またその理論を作るのに役立つたのは事実である。それは恐らくは憲法の解釈を中心とする国家主義として現われ、また経済学においてもドイツ経済学の輸入として現われたには相違ないが、この時代を一言にして現わすというのに、単に帝国大学令の公布というのはどうであらうか。

しかもこの時代の終りは産業革命の成立に当ると著者はいう。たしかにそうであつて、その徴として足尾銅山の第一次の被害騒動は一八九七年（明治三十年）にあつた。そしてまた日本における最初の貧民研究、横山源之助著「日本下層社会の研究」がこのときに出版されている。そしてまた日本最初の社会主義政党安部・片山・幸徳などの社会党がはじめて結成されたのはこれより後四年目、一九〇一年である。

第五期は自然科学の時代としては八幡の製鉄所の創立を以てはじまつている。この時代は自然科学の方では、日本は多方面に偉い学者を出して日本の学術が世界に認められた時期であるという。しかれば、われわれの経済学ではどうか。

われわれの経済学では必ずしもそういえない。われわれの学問でいえることは明治三十年から大正七年までは、経済学においても、この時代に急に盛大になつて多数の学者が輩出したとはいえるであらう。金井・桑田・戸田・高野・福田・神戸・小川・塩沢・堀江・気賀の諸博士これである。これを一括して社会政策学派と名づけるのは正しいと思う。この時代において日本は一方においては一応外国経済学の輸入を終り、且つまた日本経済問題を自覚した。そのことは社会政策学会のレポートが之を証する。そして事実、学界を代表したものは彼ら学者グループの機関であつた

ところの社会政策学会であつた。この学会は周知の如くこの時代のはじめに成立し、この時代と共に終つてゐる。それと八幡製鉄所の開設とはむろん重大な関係があるが、これを以てこの時代の学問の進歩を現わそうというのは少しくむりである。

経済学にとつては大正六、七年即ち前の表で理化学研究所ができた時は大きい転機であつた。それをシムボライズするものは何といつても、河上肇の「貧乏物語」(大正六年)であつた。というのはこれは、社会主義の本ではないが、最早社会政策の本ではないからである。いなこれは社会主義の正しさを信じつゝ社会政策を主張している奇妙な本である。しかし、この本をよむと何人も、日本の経済学の過去をふり返つて見て、それについての批判を感じざるを得ない。少くともそれより十年前のことが思いおこされる。それは外ならぬ幸徳事件でありまた幸徳がその一員であつた平民社の運動である。そしてそれは明治の末年のことであり、日露戦争及びその経済的社会的帰結と大いに関係をもつてゐる。幸徳の「帝国主義」は一九〇一年、「社会主義神髓」は一九〇二年であつた。経済学史としてはそういうことも重要でないかと思う。

しかしながら第五期の終、第六期のはじめがわれわれにとつて大きな時期の転換であつたといふことは、単に「貧乏物語」が出たということだけでなくこの時代が大きい変革の時代であつた。その変革については、大正七年が米騒動の年であつたこと、そしてそれはロシア革命の年であつたことが、むしろ「貧乏物語」が生れる時代であつたといふことでもあるように思える。

前表では理化学研究所の創立を以てこの期間がはじまるとしてゐる。そこで何か似たようなことがわれわれの学界に起つてゐないかと考えて見ると、われわれの学問の分野にはいろいろのことがある。その第一は東京大学、京都大学その他諸大学の経済学部の独立であつて、これは大正八年である。次に大原社会問題研究所の創立であつて、これも大正八年である。そして第三は労資協調会の創立であつてこれも大正八年である。このいずれもは、その創立は、米騒動、デモクラシーの運動と重大な関係があり、一般にこれらは、日本の学界の社会問題についての新たな自覚とつらよる。

そして右の時代区分では、この時代の長を日本の産業技術独立の時代としているが、われわれの学問において、そういう表現は必ずしも的確ではない。というのは、この時代は日本の唯一の経済学であつたドイツ流社会政策学派に対する批判の時代であつたといつてよいからである。そしてそれを批判したものは堺利彦、山川均等々の人々であつたともいわれるが、しかし学問の世界でそれを花やかに代表したものは河上肇であつた。それに対して前述の社会政策学派を率いてそれを防衛したものは福田徳三であつたといつた方がよいかも知れない。そしてこの時代の終りにおいて、社会主義の側が一つのエポックを作つたことはやはり学界としては重視すべきである。それは岩波書店の「日本資本主義講座」の出現であつたと私は思う。この講座は山田盛太郎の「日本資本主義分析」、野呂榮太郎の「日本資本主義発達史」を以て代表せられると思う。これは二つとも今日から考えると、すい分不完全なところがあるが、ともかくも、マルクス主義が日本の経済学であり得るといふ可能性を示したことに於いては大きな指標であつたと思う。このことはこれの批判としての榎田民蔵の「わが国小作料の特質」その他マルクス地代論に関する諸論文と共に、その後今日に至るまでの日本経済史ならびに一般近代日本史の研究が、これらの説の祖述と批判とをそのスタートとしていることによつてあきらかである。そしてわが経済学が、今日著大な進歩をしたのは、これから出発したいろいろの研究のおかげであることは否定出来ない。

しかしさらに考えると、これらのエポック・メイキングの作物が生れたのには大きなバックがあつた。それはいうまでもなく日本無産政党の勃興である。即ち、大正十一年の第一次共産党、大正十五年労働農民党の結成、同年第二次共産党の結成、社会民衆党結成、日本労働農民党の結成、昭和三年の三・一五事件、昭和四年の四・一六事件の結成という事実、また、一九二七年モスクワにおける日本共産党のテーゼ、一九三二年の同様の事実などもあつた。これらをどういふふうの評価すべきか、なかなか問題である。

次に第七期は、前表では一九三二年学術会議の設置となつておる。これを湯浅氏は「組織的協力による科学の進歩」といふふうの規定している。

しかし、考えてみればこれは滿洲事変以後の戦時的体制の時代である。われわれの経済学の領域において、この時

代において大きい学問的進歩があつたといえるか、とくに組織的協力がそのうちにあつたといえるか、それは、疑問だと私は思う。このとき恐らくは一番有名であり、そして最もよく売れた著書は、難波田春夫君の「国家と経済」でなかつたかと思う。こういえばそれに対して、そうではないという人が多いと思う。といつて何か代表的な作物があるかといえ、誰もこれだとはなかなかいえないであろう。そして、かりに難波田君の本をわれわれ学界のエポック・メイキングな本として見ても、あれは、いうまでもなく一種のファシズム的イデオロギーの一つの建築であつて、科学の本として何かを吾々に教えたというのは無理である。またこの時代の学界の主流として、或は土方成美博士と高田保馬博士があつたともいえるかも知れぬ。前者は日本主義経済学の提唱、後者は民族主義経済学の主張を以てこれを現わすことができるのであろう。しかしどちらもそれぞれ主張にとどまつて、それによつて何等かいうに足るほどの積極的な政策また理論は生れて来なかつたことは事実ある。今日誰もがこの両人のアルバイトを以て日本経済学史上ナツハ・ブライベンデなものとはしないであろう。これを要するにこの時代において、われわれの学界においては、組織的協力的学問的進歩があつたといふことはできない。いえることは政府においてそういう希望とそれへの努力があつたといふこと、そのため却つて自由な学問の進歩は止まつたといふことである。強いていえばこの時代はいままでのでせつかくの学問を破壊した時代であつたといつた方がよいかもしれない。即ち、この時代の日本の政治は日本の社会主義的思想を弾圧することに成功した。そのために一部の学者の力をかりて一切の学問の自由を奪つたのである。そしてそれによつて損をうけたものは社会主義だけではなかつた。従来のも社会政策的経済学もまたほとんど破たんしたのである。

以上、ヤム・アト・ランダムに、しかし私自身の約半世紀に及ぶ読書の印象から一定の標準を以て経済学の時代区分をして見たのであるが、私のこのような時代区分は果して前記の湯淺氏の区分と一致するだろうか。いいかえれば湯淺氏の自然科学の時代区分はわれわれの社会科学の方面にも妥当するだろうか。私はある意味ではむしろ然りと答へねばならぬ。しかし、湯淺氏の区分、すなわち政府の政策を中心にして、そのまゝにわれわれの方に応用するならば、それは、歴史の一般的法則を示すものとしては不完全のように思われるのである。即ち、もし湯淺氏の例によつ

て経済学史を分類するならば、第三期には学制領布をとり、第四期に帝国大学令の公布をとるならば、第五期には京都大学、神戸高商の増設をとらねばならぬであろう。そして第六期は経済学部を創立をとらねばならぬ、或は大原社会問題研究所・協調会の創立をとつてもよい。そして第七期は日本學術振興会の創立をとらねばならぬであろう。これもまたたしかに学問進歩の一つの指標ではあるが、さて、それらの政策によつて、われわれの学問がそういう機関のうちから本當のモーターを得て、今日の経済学ができたかという、私は何となくそれでは、われわれの学問の進歩の方向と内容とは、明らかにならぬように思う。そしてその欠点は、右に私が試みたように、直接に著名な著書すなわち、それぞれのアルバイトを以て学問の進歩の指標としないからであると思う。

これを要するに湯浅氏が自然科学の時代区分についてやつてゐることが、正しいかどうかという問題について直接に答えることには私は興味もなく、それをやる資格もないけれども、その分類の結果を直ちに社会科学の方にうつして考えると、この区分方法には必然性が見られないと思うのである。即ち、あまりに形式的であつて、実質的ではないと思うのである。

私がとくにこういうことを今日ここでいうのは、一体学問の進歩を規定するものは何であるかということについて、いやしくも学問をする者として考えて見ることが必要であり、少くともそれが自己反省の一つの心がかりとなると思つたからである。何といつても学問は人間のすることである。学問とは、ある人間の頭の中にある思想または原理が世に示されることによつて、学問となるのであり、その社会の学問的財産となるのである。いかに研究所が出来、いかに政府の奨励があつても、学問的アルバイトがなくては学問の進歩はない。さらにいいかえれば、学問の進歩を担当するものはやはり学者個人であり、それを具体的に示すものは学者の作品であるということは、学問の歴史を考へるのについで重要である。そういう意味では、学問も芸術と同じくあくまでも個人的な性格をもつてゐる。尤も、さらにその個人がいかなる社会的條件によつて支配されるかといへば、むしろその条件のうちにはいろいろの事があり、彼の遺伝はどうか、彼の少年時代の教養はどうか、彼の周囲、先生、友人はどうか、というような問題がある。さらにその條件を規定するものとしての国家の政策がある。そしてその政策は場合により個人の事情によつて

相當に重要な意味をもつことは否定できない。しかし、学問の進歩を具体的に規定するものは何といつても、そういういろいろの條件のもとにおいて生産されるところの個人の作物（アルバイト）である。もしそうだとすると、社会科学であれ、自然科学であれ、学問の歴史の時代を区分するものは、やはり、学問上における原理の発見であり、その発見を現わすところのアルバイトであると思われる。そういう意味で、学史の時代区分をしようと思えば、そういうアルバイトの学問の進歩の上における意義を確定することではなくてはならぬ。

私が右にのべたのは、私のほんのせまい読書の印象によるメモアールにもとづく一つの断想に止まる。私ののべたことは、それを以て日本経済学史の区分として人に示すべきほどのものでは決してない。けれども、社会科学の時代区分をするという上において何が重要であるかということについての着想として、学問的アルバイトを軽視する考にはさんせいできない。

これを逆の方面からいうと、日本においては、学問の進歩を規定しているものは、国家の政策であるという事實は否定できないことであるから、国家の学問政策を以て時代を画することは無意味ではなく、たしかに便利な方法でもあるが、それをあまりに重要視すると、学問の進歩の形とその内容とを示し得ない危険があるというのである。

さて、いまは如何なる時代であるか、この表によれば、それは日本学術会議時代であるということになつてゐる。日本学術会議は政府の学問政策に関する一般的な諮問機関であり、この機関は一方においては学問の自由を守ると共に、他方においては学問の進歩を促進する方法を政府に建議する学者の会議である。もし、この会議がその目的を達し得るならば、従来のようなまずい学問政策はなくなり、学問は自由な発展をとげると共に学問の進歩に必要ないろいろの賢明な政策が行われるはずである。しかし、それによつて、日本に直ちにいい学問が大いに起るといふことは期待する方が無理である。学問の進歩はそういうことだけではできない。そういう條件のもとにおいて学者が、実際にいい研究をし、実際にいいアルバイトをすることによつてのみ進歩する。そこで日本のいまの社会は学者が学問をするのにいい條件にあるか、学者各個人はそれぞれいい条件を具えているか。そういうことが問題となるであろう。

日本学術会議は本年の総会において原子力研究所設立の必要を議定した。原子力の研究の必要はむろん誰でも認め

るが原子力の研究が實際うまく行くかどうか、またうまく行つたとき、その社会的意義はどうなるか。例えば原子爆弾の製造という問題とどういう関係に立つか。自然科学の問題としても、社会科学の問題としても、重大な問題がふくまれている。それとともに、いまの時代は、日本にとつては、日本の経済・政治が独立し得るか、独立し得ないか。それと戦争とはどういう関係があるか、われわれはそういう大きな問題をつぎつぎにたくさんもつてゐる。学問が人間社会の人間の幸福にとつてプラスになることが必要であると仮定して、さらにそういう学問がほんとうに学問の進歩であると仮定して、われわれはどういうことをしなくてはならぬか。例えばそういうような意識においてわれわれが学問の任務を思うとき、日本の学者は、その責任の重いこと、同時に、われわれは、われわれの与えられた條件のまずしさを嘆ぜずにはいられない。これはすべての日本の学者のディレンマである。しかし、そういうディレンマとそういう困難とにうち克つことなくして、エポック・メイキングな学問上のアルバイトを作らなかつた学者が一人でもあるだろうか。われわれは先人の歩んだ道と先人の苦心とを顧みて、自分たちの勇気を鼓舞していいと思う。私は、この困難にもかゝらず、いまや日本にもいいアルバイトが出ていいと思う。新しい時代がその名に値いするならば、私は、日本の社会科学の世界にどうしてもいいアルバイト、エポック・メイキングなアルバイトが出なくてはならぬと思う。私は、それを、この学会の人々に期待する。